

民報あばしり

NO.892
2012.11.11
発行所
日本共産党
網走市委員会
網走市北八西三
四三二一四四五八
F四三二一四四五七

生活保護基準引き下げ狙う！

野田政権は、年末の予算編成に向け生活保護基準の引き下げを狙っています。

来年度予算の概算要求基準（8月に閣議決定）に、社会保障費に切り込むことを掲げ「聖域することなく、生活保護の見直しをはじめとして、最大限の効率化を図る」と明記しています。

民自公の3党が強行した社会保障制度「改革推進」法でも、生活保護の生活扶助、医療扶助の給付水準の「適正化」をうたっています。
厚生労働大臣の諮問機関である社会保障審議会の部会では現在、検証が進められています。しかし、内容は、2007年の検証で全世帯の中で所得の低い方から1割の低所得層の消費水準と生活保護の基準額を比較する方法です。

民主党も 反対したものがなぜ？！

このようなり方に対して、日本共産党をはじめ民主党も生活保護基準の引き下げの動きを厳しく批判し、国民的な反対で断念に追い込みました。

民主党の蓮舫議員は、低所得世帯が生活保護世帯より「支出が低いなかで生活していること事態が問題だ」と述べ、このことは貧困世帯、格差を拡大するだけだと批判しました。
それが今では、生活保護基準の10%引き下げを要求する自民党に迎合して



松浦議員の談話



「大変建設的なご提起、ありがとうございます」と野田首相が答弁するありさまで、引き下げに反対した当時の主張は見る影もありません。

私は、6月と9月議会で生活保護に関して一般質問を行いました。

そこでの基本は憲法25条の健康で文化的な生活を営む権利の立場です。

生活保護受給世帯が増えた原因は、自公政権をはじめ民主党政権が、非正規雇用が当たり前の雇用形態を認めているためであり、政治の責任です。安易な生活保護基準の引き下げは許せません。

松浦奮戦も！

生活保護バッシングに便乗して、生活保護の改悪を狙う民主党政権。民主党の生活保

護ワーキングチームの事務局長の長尾衆院議員は、自身のブログで「生活保護制度見直しに関する党内現状」と題して、同党で生活困窮者支援を考える社会的包摂プロジェクトチームの議論を批判しています。親族に扶養できるかの問い合わせが強化されると「受給申請の抑制につながる」「生活保護バッシングを加速させる」と同プロジェクトチームが指摘したことを「気絶しそうなことになる」と述べています。その上で、長尾氏は、生活保護制度は「入りやすく、出やすい」制度とするべきである」と主張し「もしも『入りやすく、出やすい』制度に改正を行えば、確実に日本人の心が腐っていく」とまで言っています。憲法25条の精神を全く理解していない国会議員がいることは残念です。国会議員は憲法を順守する義務があるのですが…。

いっただ東奔西走

薬をもらいに病院に行き、受診までの長時間に起こった出来事です。

自分に来るまで時間がありそうなので、看護師さんから呼ばれて医師の受診室から出てくるまでの受診時間を計って見ました。
短い人で40秒、長い人で2分、平均1分30秒ぐらいでした。まるで流れ作業のように淡々と進行して行く様に「患者者に向かう時間より、ながくパソコンに向かい診察する医師との会話など十分ではなく、忙しいとは言え、こんな事ではないのかなあ」と思った矢先、となりの二人のおばあさんの一人が、看護師さんに血圧を測ってほしいと懇願したが、自動測定装置に連れていかれ操作方法を教わり、「以後これで測ってください」と言われていました。その行為自体は決していじわるではないのですが、患者さんは機械操作に疎いようで、次回は出来るかどうかわかりません。
私の感じでは、おばあさんは看護師さんの手による測定を期待したのでは思わざるを得ませんでした。そのうち私の時間が来て、受診時間は45秒、来院から会計するまで丁度90分でした。医療改悪で病院現場は大変でしょうが、大変さの中の心遣いも必要なのはと帰路思いました。

流水

久しぶりに札幌を聴いた。余韻が残る夕食は、お店にした。「こんばんわ」と、暖簾をくぐると「しばらくで

した！」と、声がかかった。そこにいた3人の若者達は50年ほど前に関わっていた。懐かしい。「米の値段が変わる」話をしていた▼Oさんは、地元の食材を全国に広げようと頑張っている。新聞にも紹介され、夏のイベントにも商品を出している。しかし、小3の時父親を亡くしている▼左側にいるAさんは、小1のとき、休み時間に高学年の投げたボールが目当たり、京都で専門の治療を受けたが網膜剥離で、右目は失明した。が、親のあとを引き継いで頑張っている。心労を重ねていた母親は亡くなっていた▼右側のYさんは、親から受け継いだ店を多数に増やして経営している。彼の右耳、中学生時、野球のバットが当たって難聴になっていた▼老舗の久田紙店が10月で閉店し、4条通りの燈がまた一つ消え、3人の成長の経過と重なり重苦しい。「そうだったの。」一言葉が出なかった▼しかし、3人は、網走を元気にするため、辛い経過もすっかり受け入れ逞しく、「お酒」も酌み交わしながら談笑している。札響の余韻が戻ってきた▼帰りがけ握手をした。”応援しているよ。”と。(つ)